

保育者志望学生のメンタルヘルスと支援方策の検討
—近畿大学九州短期大学保育科1年生への調査から—

橋本 翼* 垂見 直樹

A Study of Mental Health Condition of Junior College Students Who Want to
Become Nursery School and Kindergarten Teachers and Consideration to
Effective Support System for Students
—From a Survey into First Grade Students of Early Childhood Education
Course in Kyushu Junior College of Kinki University—

Tsubasa Hashimoto Naoki Tarumi

Abstract

In this paper, we investigate the mental health condition of students in first grade of Nursery Course in Kyushu Junior College of Kinki University (KJC) by doing a questionnaire survey (UPI) and free descriptive survey. On the basis of the results, we consider an effective support for them in our college.

The results of the survey are as follows. First, there are many students under serious mental health conditions among respondents. These students seem to have needs for support to continue college life steadily. Second, we found out seven categories about contents of the problems or worries that students have by analyzing free descriptive answers. We named these categories, *feeling like a burden toward their school work, worry about relationships between friends in school, hesitation in career decision as nursery school and kindergarten teachers, anxiety for work environment or condition after being nursery school and kindergarten teachers, loss of motivation to be a nursery school and kindergarten teachers, negative self-image, and anxiety for physical and mental health of themselves.*

We found that the students have various types of problems and our college has room for improvement to meet their needs. Therefore, as college staffs, we have to support them by organizing supporting structures for following up on college students after entrance. Especially, it seems to be important and effective that making the most of mental counselors' ability or specialization at student support room systematically. With that view, we pointed out that colleges have to consider how to put mental

* 近畿大学九州短期大学非常勤講師

counselor and student support room to practical use sufficiently.

Key words: mental health of college students, effective support for college students, students who want to become nursery school and kindergarten teachers

はじめに

日本の高等教育政策がグローバル人材、イノベーション人材の育成を標榜する一方で、元来地域密着型の高等教育機関としての役割を担ってきた短期大学（以下、短大）は、学生教育に関して、質の異なる課題に直面している。仮に、授業を「狭義の教育」の場ととらえれば、「広義の教育」として学生の学修・生活・就職等多方面に及ぶ支援機能が要請されているといえる。通常の授業に加え、授業の場にとどまらない学生支援の質的向上が喫緊の課題とされている。

一般的傾向として、高等教育機関に対し広義の教育機能を要請する声は強まっているが、中でも短大は、18歳人口の減少と大学等進学率の増加などを背景に、学生の質的変容への対応を迫られている。平成25年12月に中央教育審議会大学分科会大学教育部会の下に設置された短期大学ワーキンググループは、短大のおかれている現状について「短期大学に進学してくる学生も多様化しており、必ずしも基礎学力が十分ではない学生や経済的に厳しい状況にある学生の増加に伴い、一人一人の学生の課題へのきめ細かい対応が一層必要となっている」と述べている（2014：7）。これは、多くの短大の現状をいいあてているといつてよいだろう。ここでは、学生支援の重要性と必要性が指摘されている。学生支援の充実・質的向上は、短大における焦眉の課題である。

問題の所在と研究目的

学生の抱える問題は、経済的なものから、精神的なものまでさまざまである。特に、精神的な悩みは近年多様化しており、その対応には、専門的知識を有する（より具体的には、臨床心理士資格を保有する）心理カウンセラーの配置が効果的であると考えられる。日本学生支援機構によれば、「専門性を有するカウンセラーによって担われる、個別面接を中心とした心理的・教育的な援助活動」を狭義の学生相談とし、広義の「教育及び支援活動における相談機能全般」を学生支援としている（2007：9）。

2010年度の大学、短期大学、高等専門学校における学生支援の取組状況に関する日本学生支援機構の調査（2011：3）によれば、学生支援を担当する組織の支援内容は、「学生相談」が最も多い。学生相談を担当する組織については、大学全体では「クラス担任、指導教員等の教員」の割合が最も高く（84.7%）、短大においても同様に最も高い（89.0%）。次いで、「学生部や学務課等の事務組織」（大学全体：84.0%、短大：77.0%）、「学生の相談に対応する独自の組織（学生相談室等）」（大学全体：82.5%、短大：77.0%）と続いて

いる。また、心理カウンセラーの配置状況については、大学全体で 87.9%、短大で 76.4% となっている。

学生の抱える不安は多様化しており、臨床心理士としての専門性を有する心理カウンセラーによる狭義の学生相談と学生支援が有機的に連携してこそ、その支援機能は効果を発揮するものと思われる。心理カウンセラーに心理的側面からの支援の役割を分担する一方で、専任の教職員による手厚い支援体制が求められるだろう。学生の多様な支援ニーズに対する組織的な学生支援体制の構築が望まれる。本研究の目的は、上に述べた現状を踏まえ、本学保育科 1 年生への質問紙調査により学生が抱える悩みや不安の内容を明らかにする。そして調査結果を踏まえ、学生相談が学生支援機能として効果的に機能するための具体的方策を検討したい。

方法

<調査対象>

本学保育科 1 年生。在籍者数は 2014 年 10 月現在で 72 名であった(他学科への編入者、退学者を除く)。

<調査時期>

2014 年 10 月 6 日(月)、著者(橋本)が担当する「教育心理学」の授業時間に質問紙を配布し、共著者(垂見)と共に説明を行った上で学生に記入を求め、その場で回収した。

<調査内容>

質問紙は以下の内容で構成されている(巻末に資料として掲載)。

(1) UPI (University Personality Inventory: 大学精神健康調査) の短縮版

UPI は大学生の精神的健康を調査する目的で開発され、様々な大学で用いられている。UPI で短大生のメンタルヘルスを測定する研究も少数であるが見られる(佐藤、2012; 石川、2002; 齋藤、2002; 齋藤・三上、2000)。現在は学生の精神的健康度を把握するため、主に 4 月の入学時に UPI を測定する短大が多いと考えられる。

本学においても UPI の中から 30 項目を選んだ短縮版を 4 月の入学時に実施している。訴えの内容から、「精神身体的訴え」(「不眠がちである」など)、「抑うつ傾向」(「悲観的になる」など)、「対人不安」(ものごとに自信が持てない)など、「強迫傾向・被害関係念慮」(「他人の視線が気になる」など)の 4 つに分類できる。本研究では、「最近半年間に(短大入学後)」各項目を経験したことがあるかを質問し、回答を求めた。4 月に実施した UPI は短大生活が始まった当初の精神的健康の指標であったことに対し、今回行った調査では短大入学後の精神的健康度について回答を求めた。

(2) 学生の悩みの内容に関する自由記述式の質問

1) 学生の悩みの内容に関する質問

保育科の 1 年生が、現在どのような心理的悩みを抱えているのかを探るために、自

由記述式の質問項目を設定し、回答を求めた。以下の 5 項目に関して、それぞれ悩みが「ある」か「ない」かについて選択式で回答を求め、「ある」と回答した者にはその内容を書ける範囲で記述するよう求めた。質問項目は、①短大生活に関する悩み、②自分の将来に関する悩み、③人間関係に関する悩み、④自分に関する悩み（性格等）、⑤その他、であった。

2) 相談相手（サポート源）に関する質問

自由記述で回答した悩みについて、相談できる相手が現在いるかどうかを尋ね、相談相手が「いる」か「いない」のいずれかに○をつけるよう求めた。

3) 相談の希望の有無に関する質問

本研究は学生のメンタルヘルスに関わる内容を扱うため、メンタルヘルスが悪化した学生のフォローアップ面接を行うことが倫理的配慮として求められる。そのため、質問の最後に相談を希望するかどうかを「相談を希望する」「希望しない」のいずれかに○をつけることで尋ねた。

なお、相談を希望した学生に対しては、臨床心理士の資格を持つ著者（橋本）と共著者の専任教員（垂見）が学生のニーズに応じ、分担してフォローアップ面接を行った。

結果

質問紙に回答した人数は当日欠席者 12 名を除く 60 名であり、回答率は全学生の 83.33% であった。

(1) UPI 短縮版の結果に関する分析

Table 1. に UPI 短縮版の平均値及び標準偏差 (*SD*) を示した。UPI 短縮版の平均得点と他短大での UPI 得点との比較は、質問項目数が異なることから行うことはできないが、例えば吉武 (1995) の研究では T 短大及び K 短大という二校の短期大学の UPI の平均値はそれぞれ 11.0 点、10.0 点である。通常の UPI は 60 項目から構成されており、最高点は 56 点であることから、本学保育科の 1 年生の平均値は他大学の平均値よりも得点率が高い（最高は 30 点）ため、本学学生の UPI 得点は他大学に比べ高率であると思われる。

Table 1. UPI短縮版の得点

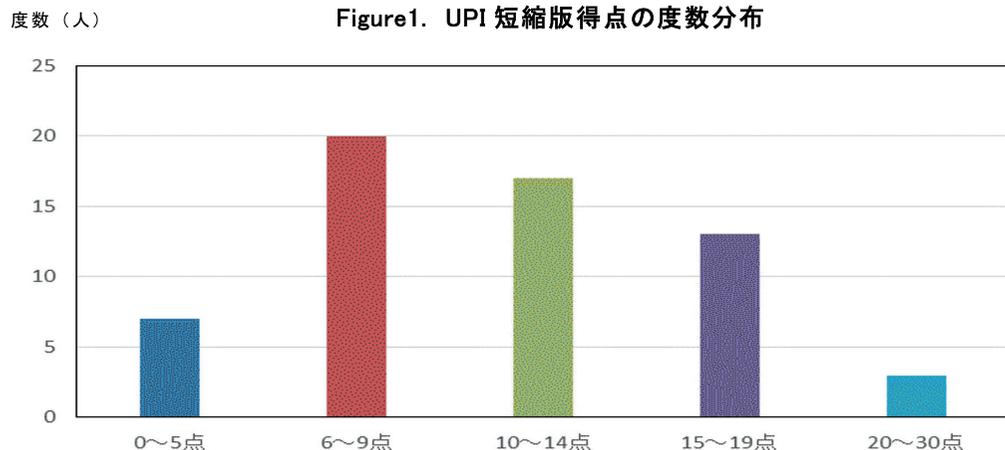
度数(人)	平均値(<i>M</i>)	標準偏差(<i>SD</i>)
60	10.7	4.93

また、UPI 短縮版得点の度数分布を Figure 1. に示した。得点別に見ると、「0～5 点」の人数は 7 名 (11.67%) であり、「6～9 点」の人数が最も多く (20 名 ; 33.33%)、次いで「10～14 点」(17 名 ; 28.33%) となる。UPI 短縮版では、15 点（全項目の半数にチェック）を要注意と捉える。したがって、15 点以上の学生はメンタルヘルスの悪化が懸念され

る。今回の調査では、「15～19点」に13名（21.67%）の学生が該当し、「20点以上」に3名（5%）の学生が該当する結果になった。のべ16名（26.67%）の学生が、メンタルヘルスが悪化した状態にあることは、サポートが必要な学生の割合が非常に高い可能性を示唆している。

また、Key項目と言われる、直接的援助が必要な項目として、「死にたくなることがある」の項目がある。本調査で「死にたくなることがある」の項目にチェックした学生は6名（10%）と、非常に高率である。この中にはUPI短縮版の総得点が低い学生も含まれているが、得点の高低だけにとらわれず、Key項目に回答した学生へのサポートもきめ細やかに行っていくことが必要である。

Figure1. UPI短縮版得点の度数分布



（2）学生の悩みに関する自由記述の内容分析

1）各質問項目における自由記述の回答者数について

まず、自由記述の各質問に対して、いずれかの項目に悩みが「ある」と回答した人数は55人であり、回答者の91.67%を占める。全ての項目について悩みが「ない」と回答した人数は5人（8.33%）であった。

次に、質問項目別に自由記述に回答した人数をTable 2.に記載した。項目別に見ると、悩みが「ある」と記載している学生の人数は、「(1) 短大生活に関する悩み」では37人（61.67%）、「(2) 将来に関する悩み」では42人（70%）、「(3) 人間関係に関する悩み」では17人（28.33%）、「(4) 自分自身に関する悩み」では27人（45%）、「(5) その他の悩み」では12人（20%）となっている。短大生活や保育者としての将来像に関する悩みを訴える学生の割合が高い。

2）相談者の有無について

悩みを相談できる相手の有無について尋ねた項目では、54人（90%）の学生が相談できる相手が「いる」と回答した。3名（5%）の学生は、相談できる相手が「いない」と回答している。（不明は5名（5%））。ほとんどの学生にとって、悩みを相談できる相手がいる

という結果になったが、相談相手がいない学生はストレス状況下でメンタルヘルスが悪化しやすいと考えられるため、サポート体制を整えていく必要がある。

Table 2. 項目別に見た自由記述の回答者数

質問項目(自由記述)	度数(人)	回答者の割合(%)
(1)短大生活に関する悩み	37	61.67
(2)将来に関する悩み	42	70.00
(3)人間関係に関する悩み	17	28.33
(4)自分自身に関する悩み	27	45.00
(5)その他の悩み	12	20.00

3) 相談希望者について

今回の調査では、悩みを調査者に「相談したい」と回答した学生数は8人(13.33%)であった。学生が悩みを相談したいという潜在的ニーズを持っていることが明らかになった。一方、相談希望者のうちUPI短縮版の得点が15点以上の、メンタルヘルスが悪化している学生は0人であり、相談のニーズとメンタルヘルスの悪化した学生の現状が必ずしも一致しないことが分かった。ただ、相談希望者のうち2名はUPI短縮版におけるKey項目(「死にたいと思ったことがある」)にチェックしており、メンタルヘルスが悪化している危険性が高い。そのため、本調査はハイリスクな学生を早期に相談につなげるという観点では、一定の成果が見られたといえる。

4) 自由記述の内容の分析について

自由記述から得られた学生の悩みの自由記述について、KJ法(川喜多、1970)を用いて分類したところ7つのカテゴリーに分類された。KJ法による分類は著者と共著者の2名で行い、分類内容が一致しない点に関しては2名で協議を行った後カテゴリー化の作業を行った。Table 3にKJ法の結果得られた、自由記述の内容の分類を記載した。

以下、7つのカテゴリーごとに内容を詳細に検討していく。1つ目のカテゴリーは、「学業に対する負担感」と名付けた。そして〈授業について〉と〈精神的な余裕のなさや学業面の不安について〉と名付けた2つのサブカテゴリーに分類した。〈授業について〉の項目では、授業内容が難しく不応感を感じている様子や、課題やレポートなどの量の多さや、ピアノなど技術の習得を必要とされる教科に負担感を感じている学生の様子を伺うことができる。〈精神的な余裕のなさや学業面の不安について〉の項目からは、学業面での忙しさや不応感から、「忙しくなるか大丈夫なのか」など、授業に加え実習など保育現場での学習についていけるかという不安が表現されている。

Table 3. KJ 法を用いた学生の悩みの内容に関する分類

-
- 1) 「学業に対する負担感」
 - 〈授業について〉
 - ・ 授業についていけない。 ・ 課題やレポートが多い。 ・ ピアノがうまく弾けない。
 - 〈精神的な余裕のなさや学業面の不安について〉
 - ・ 余裕がなくなった。 ・ 忙しくなるが大丈夫なのか。 ・ 授業が楽しくない。
 - 2) 「学内の友人関係に関する悩み」
 - 〈友人関係の不満〉
 - ・ 友人から陰口を言われる。 ・ 友人の無神経な発言にいらいらする。
 - 〈親密な友人関係を持ってないことに関する悩み〉
 - ・ クラスの子の顔と名前が一致しない。 ・ 誰と一緒にいていいのか分からない。
 - 3) 「保育職に就くことに対する迷い」
 - 〈保育職への適性に関する迷い〉
 - ・ 本当に保育士になって大丈夫だろうか。
 - ・ 実習に行き出して保育士に向いていない気がする。
 - 〈保育職を選択することへの迷い〉
 - ・ 最後まで学校を続けられるか不安。 ・ 保育士になる気があまりない。
 - 4) 「保育職としての労働条件や労働環境についての不安」
 - 〈保育職として働く上での労働環境について〉
 - ・ 保育園と幼稚園のどちらで働くか。 ・ ちゃんと就職できるか。
 - 〈保育職として働く上での労働条件について〉
 - ・ 先生同士の人間関係が不安 ・ 保育士の給料で生活していけるのか不安。
 - 5) 「保育職に対する意欲の喪失」
 - ・ 自分が何をしたいのか分からない。 ・ 自分の将来が想像できない。
 - ・ 将来結婚するだろうから無理して保育士にならなくてもいいと思う。
 - 6) 「否定的な自己イメージ」
 - 〈否定的な自己認知〉
 - ・ いらいらしやすい。 ・ ひっこみじあんを治したい。 ・ 悲観的すぎる。
 - 〈対人不安〉
 - ・ 人見知りや治したい。 ・ 自分の意見を言えない。 ・ 人に合わせるのが苦手。
 - 7) 「身体精神的健康に対する不安」
 - 〈精神的健康に対する不安〉
 - ・ 他人の目線が気になる。 ・ 潔癖症過ぎる。
 - 〈身体的健康に対する不安〉
 - ・ 眠れない。 ・ お腹が痛くなる。 ・ すぐ体調を崩す。
-

2つ目のカテゴリーは、「**学内での友人関係に関する悩み**」と名付けた。これは〈友人関係における不満〉（「陰口を言われる」など）と、〈親密な友人関係を持っていないことに対する悩み〉（「クラスの子の名前と顔が一致しない」など）と名付けた2つのサブカテゴリーに分類された。ほとんどの授業をクラス単位で行う保育科の学生は、交友関係がクラス内の人間関係に限定されやすい。そのため、友人関係を形成できないストレスを抱えている学生もいれば、狭い友人関係の中で、距離感やつきあい方に悩む学生もいることがうかがえる。

3つ目のカテゴリーは、「**保育職に就くことに対する迷い**」と名付けた。このカテゴリーは〈保育職への適性に関する迷い〉（「保育士に向いてない気がする」など）と、〈保育職を選択することへの迷い〉（「学校を続けられるか不安」など）という2つのサブカテゴリーに分類された。このカテゴリーに該当する悩みを持つ学生は、短大で保育の学習を続ける中で、保育者としての職業アイデンティティを形成していくことに不安や迷いが生じている状態と考えられる。不安や迷いを受け止め、共に考えることができるような他者の存在が必要であり、教員のサポートが有効に機能する可能性がある悩みであると考えられる。

4つ目のカテゴリーは、「**保育職としての労働条件や労働環境についての不安**」と名付けた。このカテゴリーは、〈保育職として働く上での労働環境について〉（「幼稚園と保育園のどちらで働くか」など）と、〈保育職として働く上での労働条件について〉（「保育士の給料で生活していけるのか不安」など）と名付けた2つのサブカテゴリーに分けられる。このカテゴリーの悩みを持つ学生は、保育職としての職業アイデンティティの形成には迷いは見られない。「どこで」「どのように」働くかという、具体的な職場に関する悩みであり、教員側のサポートがあれば、悩みを克服していける潜在的な力を持っていると考えられる。

5つ目のカテゴリーは、「**保育職に対する意欲の喪失**」と名付けた。このカテゴリーに属する悩みには、「自分が何をしたらいいのか分からない」「自分の将来が想像できない」といったように、保育職に対する職業アイデンティティの方向喪失が見られる。エリクソン（Erikson, E.H, 1959/1973）が述べている「アイデンティティの拡散」に該当する学生達である。このカテゴリーの悩みを持つ学生に対しては、青年期という発達段階を理解した上でのきめ細やかな対応が必要になる。学生相談カウンセラーによるカウンセリングも検討していく必要があるグループである。

6つ目のカテゴリーは、「**否定的な自己イメージ**」と名付けた。これは〈否定的な自己認知〉（「悲観的すぎる」など）と、〈対人不安〉（「人見知りを治したい」など）と名付けた2つのサブカテゴリーに分けられる。このカテゴリーの記述からは自己評価が低く、自信をもって他者とかがかわることができない学生の姿がうかがえる。著者は日頃より学生たちの自尊心が著しく低いことが著者は気になっていたが、学生の自尊心を育てるような教育的はたらきかけや、学生が自分を見つめることができるような機会を積極的に作っていくことが望まれる。

最後のカテゴリーは、「**身体精神的健康に対する不安**」と名付けた。このカテゴリーの悩みは、UPI 短縮版で測定したメンタルヘルスの状態に相当する内容である。中でも記述が多かったのが「眠れない」「寝ても疲れが取れない」など、不眠や身体的疲労に関わる項目であった。不眠は精神的不調のサインでもあるため、持続する場合は学生相談カウンセラーや医療機関を紹介するなど、専門的対応が必要になる場合があることを考慮しておく必要がある。

以上 7 つのカテゴリーは独立したものではなく、相互に関連し影響を与え合っている。そのため、今後の研究においては、学生の悩みの中でどのようなカテゴリーに属する悩みが、UPI で表わされるようなメンタルヘルスの悪化に影響を与えているのか、あるいはどのような悩みが重なれば学生のメンタルヘルスに悪影響を与えるのかを調べる必要があると考えられる。

考察

(1) 本研究の成果と課題

本研究の目的は、保育系志望学生のメンタルヘルスの状態を把握し、学生が抱える悩みの質を探索的に調査することで、学生のメンタルヘルスの向上に必要な支援方を検討することであった。調査の結果、本学保育科 1 年生のメンタルヘルスの状態は良好とは言えず、非常に高い割合(26. 67%)でメンタルヘルスの悪化した学生が存在していることが分かった。なお、今回の調査で未回答であった 12 名の学生の中にもメンタルヘルスの悪化した学生が存在している可能性があるため、支援が必要な学生の実数は調査結果より多いと考えられる。

本研究の成果としては、まず保育科 1 年生の中で、支援が必要な学生が全体の 4 分の 1 以上存在するという点を明らかにしたことが挙げられる。メンタルヘルスの悪化した状態のまま多忙な短大生活を続けていくことは、学生にとっては多大な精神的身体的負担であり、授業に対する意欲の低下やその結果の成績不振、ひいては中退等につながりかねない。学生の実態を把握した上での組織的なサポートを行っていくことが必要である。

本研究のもう一つの成果は、学生の抱える悩みの内容を質的に検討した点である。Table 3 において示した学生の抱える悩みの中には、「**学業に対する負担感**」や「**保育職としての労働条件や労働環境についての不安**」のカテゴリーに含まれるような、保育職の専門家になるためには乗り越えていく必要がある悩みの存在が見られた。これらの悩みに対しては教員側が学生を時に励まし、必要な情報提供を行うことで支援を行うことが可能であろう。同様に「**保育職に就くことへの迷い**」や「**学内の友人関係に関する悩み**」のカテゴリーに含まれる悩みに関しても、学生の保育職に就くことへの戸惑いや不安、クラス内の人間関係の不満などを教員側が受け止めていく(情緒的なサポート源として機能する)ことで支援が可能であると思われる。それに対し、「**保育職に対する意欲の喪失**」や「**否定的な自己イ**

メージ」、そして「**身体精神的健康に対する不安**」といったカテゴリーに含まれる悩みに関しては、臨床心理学的なアプローチによる支援を検討する必要がある。青年期はさまざまなころの病を患うリスクが高くなる時期であり、上記のカテゴリーの悩みを訴える学生の中には専門的なケアが必要な学生が存在する可能性がある。そのため、サポートする教員側が学生の病態水準を適切に見立て、学生相談カウンセラーによるカウンセリングを勧めたり、場合によっては医療機関の受診を勧めたりすることも必要になると考えられる。

本研究の課題としては、比較対象となる集団が存在せず、結果の統計的な分析を行っていないことから、あくまで本学の保育科1年生におけるメンタルヘルスの状態の把握と悩みに関する質的検討に留まっている点が挙げられる。今後の展開として、同一集団のUPI短縮版得点や悩みの内容の継時的変化を調査することや、他短大の保育科学生に同一の調査を行い、本学保育科の学生の調査結果と比較することで、保育系学生のメンタルヘルスを向上させるために必要な支援についてより詳細な対策を立てることが可能になると考えられる。

(2) 今後の支援策に関する提言

著者は非常勤講師であるが、臨床心理士の立場から、本調査の結果から得られた知見をもとに学生のメンタルヘルスの向上に必要な支援方策について提言を行いたい。

まずは、学生のさまざまな悩みに関して教員全体で共通理解を行い、適切な支援を持続的に提供することが可能な体制を整えていくことが不可欠である。例えば本調査のUPI短縮版得点が高得点であった学生や、Key項目(「死にたいと思ったことがある」)にチェックをした学生への支援について学内で検討し、「誰が・いつ・どのように」その学生に対して支援を行うのかを明確にした上で、支援の経過と支援の結果について定期的に検討し今後の対応を協議していくことなどが考えられる。

次に、不適応に陥る危険性が高い学生への積極的な支援を行っていくことが挙げられる。例えば学生相談カウンセラーと連携し、メンタルヘルスの悪化が懸念される学生の呼び出し面接を行っていくことも有効であると考えられる。

最後に本調査を行って著者が感じたことを述べる。具体的な悩みを記述した学生の数が調査前予想していたものよりはるかに多かったことから、悩みを語る場と人がいれば、自らの不安や葛藤を誰かに伝え「分かってほしい」学生が多いのではないかと著者は感じた。今後一人一人の学生の悩みを丁寧に受け止め、支えていく体制作りを整えていくことで、不適応に陥る学生や中退を選択する学生の減少へとつなげることができると考える。

(3) 手厚い学生支援体制の構築に向けて

本学においても、2012年度より学生相談室を設置しており、臨床心理士の資格を有する学生相談カウンセラーを非常勤として配置している。しかし、開室時間が限定的なこともあり、学生の利用は限定的な状況である。本研究を通して、学生の不安・悩みの多様さを

改めて確認できた。また、学生相談カウンセラーと有機的に連携することの重要性を確認できた。

今後、学生相談カウンセラーとの連携に際し、専任の教職員により学生の不安や悩みの聴取を定期的実施すること、そして積極的に学生相談カウンセラーへの相談を勧めることなどが改善点として挙げられよう。アドバイザー制度による少人数担当制やオフィサーなどは制度化されているが、相談に訪れる学生は多いとは言えない。学生の来談を待つのではなく、教職員から学生に積極的に働きかけ、メンタルヘルスの悪化を予防するという意識を持つことが必要である。また、本研究では保育科の学生のみを調査対象としたが、他学科（生活福祉情報科）においても学生のメンタルヘルスの悪化が懸念される。学生相談カウンセラーとの連絡窓口となる教職員を学科ごとに校務分掌に（あるいは既存の分掌に業務として）明確に位置づけること、学生のメンタルヘルスの支援体制の充実が短大の教育力の向上につながるという意識を教職員が共有することが必要である。

文献

中央教育審議会大学分科会大学教育部会短期大学ワーキンググループ（2014） 短期大学の今後の在り方について（審議まとめ）

Erikson、 E. H.（1959）：*Identity and the Life Cycle*, International Universities Press
（小比木啓吾訳（1973）『自我同一性』誠信書房）

石川雅健（2002） UPI（精神健康調査）から見た現代女子短大生のパーソナリティ 東海女子大学紀要 22、75-79

川喜多次郎（1970） 続・発想法 中公新書

日本学生支援機構（2007） 大学における学生相談体制の充実方策について—「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協働」—

日本学生支援機構（2011） 大学、短期大学、高等専門学校における学生支援の取組状況に関する調査（平成 22 年度）集計報告（単純集計）

齋藤明（2002） 短大生のメンタルヘルスに関する研究（3）UPI による男女・学科の比較 千葉経済大学短期大学部商経論集（35）、61-77

齋藤明、三上修二（2000） 短大生のメンタルヘルスに関する研究（2）本学〔千葉経済大学〕新入生に対するUPIの結果から 千葉経済大学短期大学部商経論集(33)、67-83

佐藤秋子（2012） UPI から見た短大生の精神的健康の実態 国学院大学栃木短期大学紀要（47）、127-138

吉武光世（1995） UPI から見た新入生の心の健康状態について—他大学との比較をとおして— 東洋女子短期大学紀要 27、33-42

<付記>

本調査にあたりご協力いただいた保育科 1 年生の皆様にご心より感謝いたします。

【資料】

保育科 1年生 各位

平成 26 年 10 月 6 日

近畿大学九州短期大学
准教授 垂見 直樹
非常勤講師 橋本 翼

学生生活の悩みとこころの健康に関するアンケートご協力をお願い

- ・ このアンケートは、みなさんが学校生活をよりよく送ることができるには、
教員側がどのようなサポートをしていけばよいかを知るために行う調査です。
- ・ 調査の結果はまとめて分析します。結果の分析は、誰がどのように答えたか
は分からないようにしますので、安心して質問に答えてください。
- ・ 本アンケートにて得た個人情報、本人の同意なく調査者以外にもらすこと
はありません。また上記の目的以外で使用することはありません。
- ・ なお、本アンケートは成績など評価にかかわるものではありません。
- ・ アンケート実施後、相談を希望する方には必ず個別に時間をとって話を聞き
ます。

以上をお読みいただき、同意いただけましたらご協力ください。

* まず以下に学籍番号と氏名を記入してください。

学籍番号

氏名

○質問①

下記の質問は、多くの人々がしばしば経験することをあげたもので、これらはあなたの健康の理解と増進(ぞうしん)のための調査です。番号順によく読んで、あなたが最近半年くらい(短大入学後)の間に、ときどき感じたり、経験したことがある場合は「はい」に○印を、ない場合は「ない」に○印を書いてください。書き終わったらもう一度よく読んで、書き落としががないか確かめてください。

- | | |
|---------------------|--------------|
| 1. 不平や不満が多い。 | 【 はい ・ いいえ 】 |
| 2. 将来のことを心配しすぎる。 | 【 はい ・ いいえ 】 |
| 3. 悲観的(ひかんでき)になる。 | 【 はい ・ いいえ 】 |
| 4. 考えがまとまらない。 | 【 はい ・ いいえ 】 |
| 5. 不眠がちである。 | 【 はい ・ いいえ 】 |
| 6. 気が小さすぎる。 | 【 はい ・ いいえ 】 |
| 7. 気づかれする。 | 【 はい ・ いいえ 】 |
| 8. いらいらしやすい。 | 【 はい ・ いいえ 】 |
| 9. おこりっぽい。 | 【 はい ・ いいえ 】 |
| 10. 死にたくなることがある。 | 【 はい ・ いいえ 】 |
| 11. 何事も生き生きと感じられない。 | 【 はい ・ いいえ 】 |
| 12. 決断力がない。 | 【 はい ・ いいえ 】 |
| 13. 人に頼りすぎる。 | 【 はい ・ いいえ 】 |
| 14. なんとなく不安である。 | 【 はい ・ いいえ 】 |
| 15. ものごとに自信をもてない。 | 【 はい ・ いいえ 】 |
| 16. 何事もためらいがちである。 | 【 はい ・ いいえ 】 |
| 17. 他人にわるくとらえられやすい。 | 【 はい ・ いいえ 】 |
| 18. 他人を信じない。 | 【 はい ・ いいえ 】 |
| 19. 気をまわしすぎる。 | 【 はい ・ いいえ 】 |
| 20. つきあいがいやである。 | 【 はい ・ いいえ 】 |
| 21. ひき目を感じる。 | 【 はい ・ いいえ 】 |
| 22. とりこし苦勞をする。 | 【 はい ・ いいえ 】 |
| 23. こだわりすぎる。 | 【 はい ・ いいえ 】 |
| 24. 汚れが気になって困る。 | 【 はい ・ いいえ 】 |
| 25. つまらぬ考えがとれない。 | 【 はい ・ いいえ 】 |
| 26. 自分のへんな匂いが気になる。 | 【 はい ・ いいえ 】 |
| 27. 他人にかけ口を言われる。 | 【 はい ・ いいえ 】 |
| 28. 他人の視線が気になる。 | 【 はい ・ いいえ 】 |
| 29. 他人に相手にされない。 | 【 はい ・ いいえ 】 |
| 30. 気持ちが傷つけられやすい。 | 【 はい ・ いいえ 】 |

○質問②

現在のあなたは、それぞれ下を書いてあるようなことらについて悩みがありますか？

それぞれの内容に当てはまる悩みがあれば「ある」に○を、なければ「ない」に○をしてください。「ある」と答えた人は、書けるはんいでかまわないのでどのような悩みかを、空欄のなかに書いてください。

(1) 短大生活についての悩み

【 ある ・ ない 】どちらかに○をつけてください。

「ある」と答えた人は、以下にその内容を書いてください。

(2) 自分の将来についての悩み

【 ある ・ ない 】どちらかに○をつけてください。

「ある」と答えた人は、以下にその内容を書いてください。

(3) 人間関係についての悩み

【 ある ・ ない 】どちらかに○をつけてください。

「ある」と答えた人は、以下にその内容を書いてください。

(4) 自分自身について(性格など)の悩み

【 ある ・ ない 】どちらかに○をつけてください。

「ある」と答えた人は、以下にその内容を書いてください。

(5). その他(健康面、家族など)についての悩み

【 ある ・ ない 】どちらかに○をつけてください。

「ある」と答えた人は、以下にその内容を書いてください。

○質問③

現在のあなたには、悩みがあったとき相談できる人がいますか？相談できる人がいる人は「いる」に○を、相談できる人がいない人は「いない」に○をつけてください。

・ 自分には悩みを相談できる人が

【 いる ・ いない 】どちらかに○をつけてください。

○質問④

質問①、質問②で書いていただいた悩みについて、あなたは現在相談がしたいですか？

相談がしたい人は「相談したい」に○をつけてください。相談しなくてもよい人は「相談しなくてもよい」に○をつけてください。

(なお、相談する相手は調査者(橋本、垂見)、必要に応じ本学教員や学生相談室職員を紹介します。)

・ 自分は悩みを

【 相談したい ・ 相談しなくてもよい 】どちらかに○をつけてください。

★質問は以上です。もう一度最初から読み返して、記入もれがないかよく確認してください★

ご協力ありがとうございました。